

# 月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第13号 2016年1月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を  
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会  
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1  
近畿大学教職教育部 富岡研究室  
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP(最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 貴人の巡廻	小宮山 道夫	2
逸話と世評で綴る女子教育史(13) 官立東京女学校の斬新さ	神辺 靖光	4
私が何気に読んでいる本、あれこれ —私にとっての学びとはなんだろう—	谷本 宗生	7
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道 第13回 学校沿革史にみる補習科・専攻科(9):島根県(3)	吉野 剛弘	13
近代日本における大学予備教育の研究⑬ —神戸商業大学の大学予科設置をめぐる論議①—	山本 剛	16
「学生寮の時代」④ —江戸時代の「学生寮」—	金澤 冬樹	20
2つの報道写真	松嶋 哲哉	26
新制大学の生態誌(12) —新制大学と戦争・平和[6]—	井上 美香子	32
青年志賀覚治の上京と徴兵	小宮山 道夫	36
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか(11) —東京府 尋常中学校長 勝浦頼雄の校友会活動観(その3)—	富岡 勝	41
ニューズレター 2015 アワード発表!	小宮山 道夫	44
刊行要項(2015年6月15日現在)		49
編集後記		50

## コラム

### 貴人の巡廻

こみやま みちお

小宮山 道夫(広島大学)



「貴人の巡廻」ときけば天皇の行幸や巡幸を思い浮かべる方も多いことだろう。とりわけ明治天皇の地方巡幸、いわゆる六大巡幸がピンと来る方もいるはず。写真は福島県郡山市の開成館の3階に当時設けられ、現在復元されている行在所の姿。開成館は明治7(1874)年に区会所として建築され、明治9年と明治14年の2度の明治天皇の行幸の際に使用された擬洋風建築である。玉座の周りには畳の廊下が巡らされ、奥には専用の御厠と御浴室が続く部屋が巡幸に際し設けられた。

その六大巡幸に負けず劣らず地方を熱心に視察して歩いた有名な国務大臣が森有礼初代文部大臣である。『岩手学事彙報』第133号(明治21年10月15日)の「雑報」欄には次のような記事がある(16~17頁)。「●森大臣巡廻に就ての仙台」と題し本月九日の東京日日新聞に本月四日午後汽車にて文部大臣来仙の由区内何となく大騒ぎ」というのでその様子を見てみよう。

「各学校生徒は運動会を明日宮城野原の陸軍練兵場に催し閲覧に供する由にて某々小学校の如きは一両日以前より体操唱歌のみを復習し他の学科は全廃したる程にて秋の短日とは雖も九時より二時まで立詰に立て体操唱歌の小童輩は甚疲労し為に病を醸したる向もあり泣顔造つては父兄に訴ふるもの実に多し」とのこと。

昨今では度を越えた組み体操が「学校リスク」として問題化し世間を騒がせているが、無理をしてでも少しでも良く見せたいという意識、況してや文教のトップに見せるのであるからその意気込みの程は尋常でなかった

のであろう。児童に日々接し個々の性質やその体調を知悉しているはずの教員たちも、児童の疲労困憊に気づけぬまま、一斉の集団訓練を施したようである。あるいは「つらい」とか「無理」とか「私」の事情を漏らさぬ児童たちを見て、精神修練の成果と、つい感動し見誤ったものか。事実関係は不明だが、教育は時代を超えて常にどこかに狂気を孕んでいるとも言えよう。

町中にも影響がある。「明日は県会議員其他有志者を警察本部の樓上に召集し何か示達せらるゝ趣にて已に通知を受けたるものあり」とあるように、県の名だたる人物たちは一カ所に呼び集められて文相の話を聞くこととなる(この演説は『森有礼全集』第1巻、637～640頁に所収。底本は『教育報知』第140号(明治21年10月13日)である)。そして「県庁にては俄に大工土方等多人数雇入れ庁中隈なく掃除し破損を手入し敷物の絨毯を新調し玄関前の池は藻草を渫はせ門外の道路は櫓下と称する処より師範学校の辺までは三丁余の処に砂利を敷き列ねて俄に外観を修飾する杯中々の大騒なり」とのこと。悪く言えばその場しのぎの取り繕い、良く言えば機に乗じた地域整備。行幸道路の整備にも似た一幕である。

「斯る事は我県にては今に始めぬ事なれとも唯斯くして我県の教育上に付其実況を見らるゝを得へきかと区民は不審議を感せり」とし、「冀くは今後の御巡廻は何卒最妙寺時頼流に願ひたし云々とあり」と記事は終わる。最妙(明)寺時頼流とは、謡曲「鉢の木」でも有名な五代執権北条時頼の廻国伝説にかけた話。出家して身分を隠し水戸黄門張りに諸国を巡り様々な逸話を残した時頼の、質素儉約の巡国の物語である。貴人たちも身分を隠すことができれば社会の実情を掌握することが可能となるのだが、現実世界では甚だ難しいことだろう。現代貴人の巡廻の程や如何に。

**\*このコラムでは、読者の方からの投稿もお待ちしています。**

## 逸話と世評で綴る女子教育史(13)

### 官立東京女学校の斬新さ

かんべ やすみつ

神辺 靖光(月刊ニューズレター同人)

中川謙次郎が“縞の袴をはいた不思議な格好をした女学生”と評した通り、東京女学校はすること為すこと世人にはわからないことだらけであった。その斬新さについて、前号であげた文部省布達文に続く「女学校入門之心得」を記し、そこからそれを指摘しよう。

女学校入門之心得 但当分英学之事

- 一、受業料毎月金貳両可相納事
  - 一、書籍等ハ銘々持参可致事
  - 一、稽古時間ハ毎日五字間ノ事
  - 一、生徒ハ女子八歳ヨリ十五歳迄ノ事
- 但女学校ハ凡テ通稽古ノ事

ツケトドケ

「受業料」について、まず考えよう。『日要新聞』の記事は「受業料」とルビがふつてある。それほど新しい言葉であった。“付け届け”とは日頃、世話になっている家に盆暮に贈物をすることで、私塾や寺子屋では弟子や親が、わずかな金子またはなにがしかの小品を贈ったものであった。毎月、金子で納める月謝と異質のものであるが、“受業料”が新語で、一般にわからないから、きんす“ツケトドケ”とルビをふったのである。

“授業料”は福澤諭吉の造語である。慶應4(1868)年の頃、慶應義塾は生徒が増えた。そこで、福澤1人では教えきれなくなり、弟子の中で成績のよい者を教師にとりたてた。福澤は翻訳で、かせいでいるからいいが、教師達には給料を払わねばならない。そこで授業料(福澤は授業料と言い、東京女学

校は受業料と言う)という言葉を考え出し、毎月、生徒から2分(明治の金銭に直して50銭)ずつ取り立てることにした。『福翁自伝』に書いてある。“教師も人間だ。人間が人間の仕事をして金をとってどこが悪い”と福澤はタンカを切っている。これから給料で生活する教師と授業料を払って学ぶ生徒という明治型学校が始まるわけだが、幕末明治初年はそういうわけにはいかなかった。

寺子屋は少額であるが、束脩(入学料)、天神講(月謝)、五節句の謝儀などをとっていた。漢学塾も束脩や月棒(食費)を納めるしきたりがあったが、藩校には授業料がなかった。藩士を教育するのは藩主のつとめという考え方で学費はすべて藩費でまかなわれた。幕末になると各藩は優秀な藩士を江戸の昌平坂学問所や京・大阪・長崎などの有名な私塾などに遊学させるが、その際も学費やその地での生活費はすべて藩が負担したのである。

明治になって東京の大学南校(西洋学)、大学東校(医学)に各藩から貢進生を送るようになった。貢進生は各藩選抜の秀才であったから、その学費も生活費もすべて藩負担であった。東京女学校は南校で開校した。つまりはじめのうちは南校貢進生と同居していたのである。貢進生は無料である。しかるに女学生は授業料を月2両払わねばならぬ。

明治4(1871)年5月の「新貨条例」は1両即ち1円としているから、2両は2円。当時、書生が1ヶ月、寄宿する賄料が2円50銭であるから2両の月謝は高いと言わねばならない。慶應義塾の授業料は2分(50銭)であった。

「入門之心得」はまた教科書について各自持参すべしと言っている。南校も女学校も洋学を教える。貢進生たちは学校備えつけの洋書で学ぶが、女学生は高価な洋書を買わねばならない。“華族より平民に至るまで”などと体裁のよいことを言っているが、裕福な家でなければ、娘を東京女学校へあげら

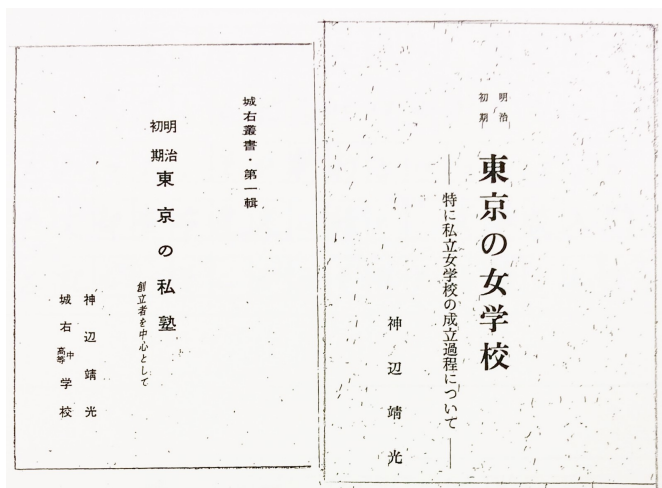
かよいけいこ

れない。さらに「女学校ハ凡テ通稽古ノ事」とある。近世の慣習として、学問で

も武芸、技術でも師の家に寄宿して学び習うのが原則であったが、時代が下って、弟子が多くなると師匠の家に収容し切れなくなった。そこで他所から通う通稽古が現われる。貢進生たちは、はじめ東京に残る藩邸から通ったが、廃藩置県後は校内に寄宿舎をつくるようになる。女学生は藩と無縁だし、貢進生と同居の寄宿舎には入られない。そこで通稽古となるのだが、こうなると女学生の出身範囲は限定される。けれども鳩山春子のように信州松本から入学した者を含めて百数十人の女学生を集めたのだから世間の深層部はわかりづらい。

授業料と「共立ノ学校」についてもふれておきたい。文部省布達に「共立ノ学校相關キ」の言葉がある。共立学校という名称は明治4年、廃藩以後、多出する学校名で、個人がつくる私塾でなく、共同出資の学校という意味である。東京女学校も開校当初は“共立ノ女学校”と言った。この学校は文部省がたてたもので共同出資ではない。しかるにあえて共立と言ったのは、授業料をとったからではないか。「学制」以前の官立学校は授業料をとらない。すべて官費である。東京女学校は官立学校でありながら民間資金である授業料を学校経費にあてたから共立と称したのであろう。

注 本稿は拙著『明治初期・東京の私塾』1960年刊、『明治初期・東京の女校』1964年刊によるところが多い。



# 私が何気に読んでいる本、あれこれ —私についての学びとはなんだろう—

たにもと むねお

谷本 宗生(大東文化大学)

普段の生活のなかで、私がどんな読書をしているのか?という質問を受けて、少しハツとして戸惑うことがある。そうだ、改めて考えてみると私の場合、教育学・教育史の文献は仕事場である@大学の個人研究室にて集中的に読むスタイルである。その他の本は、自宅にてのんびり読む習慣である。自宅で読む本はジャンルにとりとめもなく、その都度興味ある?気になるものを選んでランダムに読む感じであろうか。

たとえば名人棋士@羽生善治さん(1970年～)は、変化の激しい現代社会のなかで生きるうえで「車を運転した際にゆっくり走っていれば周囲の景色も把握できますが、猛スピードになると極端に視野が狭くなります。そうならないように、ときには立ち止まって、現在までを確認することも大切ではないかと考え」(『適応力』2015年、3頁)たい!と述べている。社会教育家@鈴木真理さん(1951年～)も、「『わかる』『できる』ことがいいことだ、というわけではない、『に、なっていく』という過程をもっと重視したらいい、と」(『学ばないこと・学ぶこと—とまれ・生涯学習の・ススメ』2012年、181頁)指摘し、「学習することに終わりはありません。『に、なっていく』のだから、いつまでたっても行き着かない、そもそもどこかに行き着くことが重要だとは考えられないのです。何かを学んでいる人は、ちょっと立ち止まって、その学ぶことの意味を考えてください」(同上書、181～182頁)と述べている。羽生・鈴木の両者とも、少し立ち止まって自分の歩みや姿勢を確認することを強調しているといえよう。

文筆家@山村修さん(1950～2006年)は、普段の読書の姿勢について「読みかたはたいせつだ。書き手が力をつくして、時間をかけて、そこに埋めこ

んだ風景やひびきをとりだしてみるの、ちょうど熟して皮がぴんと張りつめたブドウの一粒を、じっくり味蓄に感じさせてみるようなものだ。忙しい暮らしなかで、ゆっくりと本を読むのはあんがいむずかしい。しかしブドウのみずみずしい味わいは、食べかた一つにかかっている。おなじように、読みかた一つで本そのものがかわる。快楽的にかわる。」「『増補遅読のすすめ』2011年、159頁」と述べ、ゆっくり読むという山村流の「遅読」をあえてすすめる。「目が文字を追っていくと、それにともないながら、その情景があらわれてくる。目のはたらき、理解のはたらきがそろっている。そのときはおそらく、呼吸も、心拍も、うまくはたらき合っている。それが読むということだ。読むリズムが快きぎまれているとき、それは読み手の心身のリズムと幸福に呼応しあっている。読書とは、本と心身とのアンサンブルなのだ」(同上書、57頁)と捉えるからだ。忙しい毎日だからこそ、あえて遅読する読書は私@谷本にとっても有効的な学びなのかもしれない。それでは実際、私@谷本はどんな読書をしているのだろうか。

ちょうど朝、2015年秋からお散歩番組のナビゲーターとなったタレント@高田純次さん(1947年～)のゆるい?姿をテレビで面白く拝聴する。でも彼は、意外と池波正太郎作品が好きで真面目に読書しているという。へ、びっくりぽんや。私@谷本は、自宅近くのブックオフにて彼の自伝本『高田純次のチンケな自伝—適当男が真面目に語った“とんでも人生”—』2014年を入手して、早速読んでみる。彼にとっての大きな転機は、1977年サラリーマンをしていた30歳の時、若い時分からの演劇への夢が捨てがたく柄本明らが結成した「東京乾電池」に入団した頃のことという。「“妻子を路頭に迷わせることは絶対にしない”と誓った手前、オレは懸命に働いた。働くといってもアルバイト。しかもほとんどは肉体労働だった。…[劇団の]稽古は昼の12時から夕方6時まで。そのあと7時から朝の6時まで働いて、家に帰って11



時まで3～4時間ほど寝る。それからまた12時から稽古…。そういう生活だった。」(同上書、139頁)。しかし、高田さんにとって「充実の時期だった」と。「つらいと思ったことはなかったし、芝居も稽古もやめようと思ったこともなかった。肉体的にはきつかったけれど、オレは十分元気だった。…大きな夢はみない、目標も立てない。その時その時を、一生懸命やればいいと思っていた。オレにとって、最も重要な時期だったかもしれない。今の若い人にいいいな。不遇の時、カネのない時は、その時をシコシコ懸命に生きる。それで十分じゃないのかって。」(同上書、144～145頁)。さらに、彼はこう呼びかけている。「この本を就職前の学生さんが読んでくれるとしたら、そして、自分の進路について迷っている若い人が読んでくれるとしたら、オレはこう誘惑したいな。『ところが燃える仕事を選びなさいよ。失敗しても大丈夫だ。いくつになってもやり直しはきく。君がその気になりさえすれば、道はあるから』と。」(同上書、129頁)。これが、高田純次という男の生きかたなのだろうか。なるほど! など、そういう人生の選択もあるのか…と感じたのである。

新聞の「図書紹介」に紹介されていたこともあり、グラビアタレント@壇蜜さん(1980年～)の『壇蜜日記』2014年を、自宅近くのくまざわ書店にて購入して読んでみる(「芥川賞の又吉さんだけじゃない!キラリ光る芸能人注目の作品!!」『東京新聞』2015年8月31日、15面)。2013年秋から翌2014年夏までの1年間の壇蜜さんの、まさに飾らない?眩き日記である。日記のなかから、興味深い2～3日分を紹介してみよう。「2014/1/5 晴れ 休みだと言うと仕事が無いのかと言われる。だから最近休みでも休みとは言わない。…この世界で人間をやっていると『ちようどよい』という事はほとんどなく、人生の大半はちようど良さを山の彼方のように探しながら折り合いをつけて生きてゆくのだろう。熱帯魚のエサの分量ですら毎日ちようど良いを探すのが難しいのだ。そんなことを、散らばった水面のエサを見ながら思う。今

日は少しあげすぎた。」(同上書、66頁)。「2014/4/13 晴れ 新聞を読んでいると、つい求人広告を見てしまう。昔からのクセだが、職をいつ追われるか分からない状況なんてどんな仕事も変わらずあり得る。転職人生だったので現在の仕事は家族もどうか長続きを……なんて思っているのが何も言われなくても分かるのだが、こちらの意思がびっくりするほど反映しない世界でそれを願うのは難儀な話でもある。清掃、事務、厨房……受験を控えたこどもの送り迎えなんてのもあった。『受験を控えた進学校のこどもには、それなりの会話や振る舞いをお願いします』が条件だった。」(同上書、125～126頁)。「2014/7/6 晴れ 大概ショックなことがあると食事をしなくなり涙もろくなりよく眠る……33年間付き合ってきた傾向だ。誰かのせいにするのは卑怯なので、自分を傷つける。自傷は勇気が出ないので、生活に必要な行為をしたりしなかったりすることで中途半端に傷つけるのだ。あと、最近気づいたのだが父と遊んだ小さい頃を思い出す。父はまだ生きてるのに今の姿より昔の姿の方が思い出しやすい。大抵落ち込むことなんて、男がからんでいるので成長しない。」(同上書、177～178頁)。そして、本書の最後に彼女らしい?直筆のメッセージを添えている。「さすがに『私のステキライフを参考に、みんなもキラキラしてほしいな!信じていれば、夢は叶うよビーハッピー?』…なんて大ウソは書けませんでした。ウソつくと、まゆ毛ズレるから。それでは最後に一言だけ。ありがとう。D M Honey」(同上書、あとがき)。

先日、自宅近くの啓文堂書店(現在は閉店)にて女優@鈴木京香さん(1968年～)の女優生活25年初のエッセイ集である『丁寧@暮らすために。my favorites A to Z』2013年を、偶然目にし購入して読む。鈴木京香さんといえば、柴門ふみさん原作のドラマ「非婚家族」(2001年)で真田広之くんらとのかけ合いが私@谷本にはとても印象深い。ドラマでの話は長くなるから、今回は割愛しよう。ま柴門作品のドラマは、私@谷本にとっての青春時代

を回想するには必須といえる感じだろうか。では鈴木さんの本書のなかから、印象深い箇所を2〜3紹介したいと思う。彼女は、エッセイ本や古書、古書店などが大好きだという。へ、なるほど。「エッセイが好きなのは、丁寧に暮らすことへの憧れが強いから。時間を楽しむ工夫をしながら、自分らしく、ものや人、季節を慈しんで暮らしていきたいと望むからです。」(同上書、12頁)。「古書が好き。時間に焼けた紙の色が好き。線が引いてあったり、何かが挟まっていたりするのが好き。そおっとページをめくるのも好き。」(同上書、12〜13頁)。「古書店に入った時の、あの静けさと積み重ねられた書籍の匂い。もともと買い物へはひとりで出かけるのが好きな私だけれど 古書を探しに古書店にいくときは、かならずひとりでこっそりと。店内は私ひとりか、やっぱりひとりで来ている人ばかりです。講義までの時間潰しに、ぶらりと立ち寄る学生街の古本屋さん。ストーブの上には湯気の立つ薬缶がのっていたりして。…ひっそり店番するおじさんに小さく声をかけて買ってもらった またこっそりと引き戸を開け閉め、静かーにお店を後にします。本当に懐かしい。またしたいな。こしょっとこしょてん。」(同上書、13頁)。彼女のバタバタしない!時間感覚や落ち着いた?佇まいが不思議と感じられる気がする。

休日、自宅で朝から新聞をじっくり読んでみる。へ、意外な発見あり。ピアニスト@仲道郁代さん(1963年〜)のエッセイ@「つれづれ」は、読んでいてなんだか面白い。「ライブのコンサートというのは、最初の一音を奏でた瞬間から、時の流れとともに進んでいく。LIVE(生の公演)とは、まさに live(生きていること)なのだ。生きることには喜びと哀しみが存在する。嬉しいこと、幸せなことは永遠に続いてほしいからこそ短すぎる。つらいことはいつ抜け出せるのかと苦しむから長い。でも、抜け出せた時には、大変だったけれどあつという間だったように思える。人間とはかくも流動的、不思議な生き物だ。だとしたらもはや大切なことはただ一つ。今という時間をしっかり生きること。そん

な“今”を音にするのが、演奏家のツメなのかもしれない。」(仲道郁代「つれづれ 時間感覚の不思議 “今”をしっかりと生きる」『東京新聞』2015年10月4日)。日がな一日、なにも特段の目的意識?もなく読書にひたる!ことは、今の私@谷本にはこの上ない喜びといえるだろう。平日はなんだかせわしく1日を過ごしている。まさに、時間に追われる感じがしてしまう。そんななかでせめて休日くらい、のんびりとりとめなく読書することで自分の歩み@リズムを確認し、適度な自分のペース?を自然と調整できればホントうれしいな!と願うばかりである。何気に読書することで、自然にいろいろ思いをめぐらせることができる。私にとっての学び@読書ってなんだろう、と。あ、そうか。私@谷本の好きな詩人長田弘さん(1939~2015年)も、著書『なつかしい時間』2014年のなかで次のように述べている。「わたしたちの一日の時間をゆたかにしてきた、ゆるやかな時間」(「一日の特別な時間」同上書、142頁)を実感するうえで、「自分の日常のなかに、とにかく一冊の本がある」(「本に親しむという習慣」同上書、103頁)ことで、「どこで、どんな時間に、どんな姿勢、どんな気分で読むか。本を読むということは、本来そういう自分の流儀をまもる、確かめるという性質をもつもので」(「読まない読書」同上書、168頁)あろう!と。真理だ。

# 新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道

## 第 13 回 学校沿革史にみる補習科・専攻科(9): 島根県(3)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(東京電機大学)

今号では、専攻科の構想が頓挫した結果として設置をみた補習科の実態を検討していく。学校沿革史レベルで把握できるのは、設置当初の実態であり、その後の変遷については、生徒数や担任教員以外はほとんど明らかにされていない。紙幅の関係上、今号は教育課程と、出雲高等学校の設置当初の状況を検討する。

設置当初の教育課程が分かるのは、松江北高等学校と出雲高等学校である。両校の教育課程は、表 1 の通りである。教科名は当然のことであるが、科目名も学習指導要領にほぼ対応した形となっている。しかも、選択科目のパターンを見る限り、生徒の志望と必要な入試科目に一定程度対応しているようにはみえるが、ある特定の教科を一切学ばないということは想定されていない。受験という観点からみたとき、生徒にとってはいささか負担過重である。

表1 1966(昭和41)年段階の教育課程

		松江北		出雲	
		必修	選択	必修	選択
国語	現代国語	3		3	
	古典			3	
	古典乙Ⅱ	4			
	古典乙Ⅱ		2 *1		
	古典乙Ⅱ(漢文)		2 ※		
社会	日本史		2 *2	2	
	世界史(B)		2 *3		2 *1
	地理(B)		2 *3		2 *1
数学	数学Ⅰ		3 ※	3	
	数学Ⅱ(B)		3 ※	3	
	数学Ⅲ		3 *4		3 *2
理科	物理(B)		2 *5		2 *3
	化学(B)		2 *1	2	
	生物		2 *5		2 *3
英語	英語	7			3 *2
	英語R			4	
	英語G			3	
	英語(A)		3 *4		
	英語(B)		2 *2		
模試・体育・芸術				3	
(L)HR		1		1	
計			34		34

「\*(数字)」は同一番号内から1科目を選択

「※」は選択科目ながらも実質的な必修科目

『松江北高等学校百年史』(1976), p.1599より

『出雲高等学校史』(1990), p.533より

島根県の補習科は現在まで続いている。最初の設置が1966(昭和41)年であるから、その後現在に至るまで4回(1978年・1989年・1999年・2009年)の高等学校学習指導要領の改訂があった。その後の教育課程は学校沿革史レベルでは明らかになっていないが、ほぼ学習指導要領に沿ったものであることが推察される。

補習科は高等学校ではないので、学習指導要領に従う必要はなく、大学入試の合格のための教育を行いさえすればよいはずである。事実、駿台高等予備校(現・駿台予備学校)では昭和30年代には文理分けより細かいコース設定をし、独自教材を編集しはじめている(『駿河台学園七十年史』(1988年),pp.111-115)。河合塾では、昭和40年代以降には大学別コースを設置し、独自のカリキュラムを構成しはじめている(『河合塾五十年史』(1985年),pp.234-248)。受験準備を専門としない高等学校が実質的な運営主体となる補習科は、受験準備教育への集中度は低いということになる。

しかし、第12号でみたように、「営利を目的とした都会の予備校」とは異なるのが補習科である。普段は学習指導要領に則って指導している高等学校の教員が担当している点を勘案すると、高等学校の教育課程との対応がその後も続いたことが推察されるのである。

福岡県の補習科と同様に、島根県の補習科でも体育や芸術といった受験と関係のないものが設置されている。松江北高等学校には体育や芸術はないが、『松江北高等学校百年史』(1976年)には「教育課程はその後一部手直しがされ、学習面だけでなく、体育や特活としてホームルームの時間を入れ」(p.1601)とあり、さらに高等学校に近いものに直されたと思われる。

出雲高等学校では、補習科設置にあたって、以下のような補習科規則を定めた(『出雲高等学校史』(1990年),p.533)。

## 補習科規則

- 1、名称 出雲高等学校補習科
- 2、設置者 島根県立出雲高等学校PTA
- 3、所在地 島根県出雲市今市町 1744 番地 島根県立出雲高等学校内
- 4、設置目的 高等学校卒業生で大学進学を希望する者に対し、高等学校教育課程に、さらに精深の度を加えた教育を施して学力の増進をはかるとともに、生活面の指導に留意して健康、明朗な人格の陶冶につとめる。
- 5、修業年限 1年(4月より翌年3月まで)
- 6、入学資格 高等学校を卒業した者、またはこれと同等以上の学力があると認められた者
- 7、定員 約50名
- 8、学期・休業日・授業の日時数
  - (1) 学期・休業日は本科に準ずる。
  - (2) 1単位時間50分とし、1学年35単位時間の授業を1単位として計算する。
- 9、教育課程  
(授業時間数・表1で言及済)  
週当たり授業数は34時間とする。  
右記の外に、校内模試年6回、校外模試年8回程度、本科生と同時に行う。

校内模試の詳細は不明であるが、本科の生徒も受験していた模試のようである。定期考査より入試を意識した試験だったのだろう。

校外模試を本科生と同時にを行う点は、非常に重要である。その後の大学

入試が「情報戦」の色彩を帯びる、すなわち全国規模での情報の入手が必要不可欠になっていくことを考えれば、本科と抱き合わせとなることでしか情報が得られない状況は、受験準備教育機関としての脆弱性を示している。補習科単体では成り立たないことを意味するからである。ただ、設置当初以外の状況を知ることができないので、その後の変化については不明である。

設置目的には、生活面の指導に留意する旨も述べられている。しかし、都会の予備校にあっても、そこに通う生徒の生活指導に全く気を配っていなかったわけでもなく、生活指導を強調するだけで差別化が図れるわけではない。この点については、松江北高等学校の方が詳細な規定を持っているので、次号で詳論したい。

## 近代日本における大学予備教育の研究⑬

### —神戸商業大学の大学予科設置をめぐる論議①—

やまもと たけし

山本 剛（早稲田大学大学史資料センター）

#### はじめに

前号は、神戸商業大学(以下、神戸商大)の入学者の問題について検討した。同大学では、入学者の教育的背景に関する一定の関心の高まりが存在していた。

こうした入学者の教育的背景をめぐる関心は、大学予科設置を求める要望と軌を一にするものであった。なお、神戸商大は大学設立時に大学予科設置を要望していた。それは、大学「昇格」と同時をめざし、すでに1924(大正13)年頃から学生の希望としてもとりあげられ<sup>1</sup>、1927(昭和2)年には「商業大学二昇格ト同時ニ予科ヲ併置セムコトヲ期ス」との決議もしていた<sup>2</sup>。しかし、「昇格」と同時に大学予科設置は認められなかったことはすでに述べた。



本号では、大学設立後に大学予科設置をめぐるどのような論議が行われたのか検討する。

## 大学予科設置をめぐる論議

神戸商大では1929(昭和4)年開校時のすでに翌年から、教員と学生で大学予科問題の「座談会」が開かれ、現時では大学予科設置が不可能としながらもそれに関する論議が行われた<sup>3</sup>。さらに同年1930(昭和5)年9月には学生委員、有志学生からなる予科問題調査会が結成され、大学予科に関する調査が本格的に行われた<sup>4</sup>。

この調査委員会がまとめた同年11月付の「予科問題調査会調査資料」(以下、調査資料)の目次をみると、「一、序に代へて、一、高等学校教育制度、一、高等商業学校、一、大学と予科特に商業大学と予科、一、外国に於ける商業大学制度一斑、一、教育界諸氏の意見調査報告」とあり、それぞれ調査担当の学生名が記載されている<sup>5</sup>。このうち「外国に於ける商業大学制度一斑」と「教育界諸氏の意見調査報告」の調査にあたった当時の学生の一人である久住昌男はこの調査会は「商業教育制度上に予科設置の基礎理論」を見出すためのものであったと回顧している<sup>6</sup>。

注目すべき項目として、「大学と予科特に商業大学と予科」をみると、①旧制高校が単科大学、ことに商業大学である同大学の予備的機関として適切であるのかという点、次に②高等商業学校の普通科目が少ないことで基礎学力の点で大学の準備教育として適切であるのかという点、最後に③高等商業学校の科目が大学の科目と重複し「経済的」ではないという点に対してどう考えるべきか等が論じられている。

論者は、各学校類型の学科目を比較し、上記の問題に関して①では旧制高校文科の科目は「商業に特有なる珠算、簿記等」という「練達」を必要とする科目がないことは不利とする。さらに、旧制高校の「高等普通教育の観念

が大学準備教育の現実に転換」されていると指摘しながら、旧制高校は大学との「連絡範囲」が広いので、「特殊分科大学の大学教育」には無理を生じると結論づけている。次の②では各高等商業学校の全科目時間中の普通科目の占める割合をあげて、全科目のうち 50 パーセント程度が普通科目を有しているとして、普通教育の傾向は多分にあると指摘する。しかし、一方で東京商科大学の大学予科を例に挙げて、同大予科は全科目のうち普通科目の占める割合は実に 80%以上であるとして、大学予科と高等商業学校の違いを強調している。最後の③に関しては大学と高等商業学校は「指導精神」が違うので単に学科目の名称が同じでも一概に重複とはいえないと主張する。

加えて、この論者は旧制高校卒業者を収容する東京帝国大学経済学部商業学科(以下、東京帝大)は、大学予科がないので「商業教育上欠陥」である主張する。すなわち、東京商科大学では、大学予科で簿記、商業数学、珠算を行うので商業学の基礎知識があり、それに対して東京帝大の学科課程のなかには簿記や珠算等がなく「商業学、経済学の基礎知識」が不足していると指摘する。これは東京商科大学の学長佐野善作の意見とも一致しており、この論者は佐野の意見に依拠したものと考えられる<sup>7</sup>。なお、佐野は神戸商大設立時の同大学予科設置に賛同しており、その際、旧制高校の学科課程が商業大学の準備教育に適切ではないと主張していた<sup>8</sup>。(本ニューズレター第 11 号を参照)

以上のような大学予科設置の論拠を踏まえながら、この論者は大学予科の教育上の利益として、「適切なる学科を設け」ることで、大学教育の「最初の一年乃至二年」の教育が有効であり、「大学独自の学風」の樹立と、一貫した「人格教育の成果」が期待できるとした。

しかし、その一方で大学予科設置は「1、六ヶ年の長きに亘る学生々活は、学生をして自由闊達の気風を喪失せしむる事、2、財政関係に就き大学に対

し不利益なる立場に在る故良教授を得難き事、3、学生自身の見聞を狭める事」などの不利益な点も指摘して、本項目を結んである。

こうした大学予科設置に関する調査報告が出されていた。とりわけ旧制高校が商業大学の予備的機関としては不十分であるとの指摘は注目される。すなわち、商業大学にはそれにふさわしい準備教育が必要であるというのである。

次号では引き続き、同調査資料の「教育界諸氏の意見調査報告」から、他大学が大学予科をどのようにとらえていたのかを検討する。

---

<sup>1</sup>『神戸大学百年史』通史 I 前身校史 (神戸大学、2002 年)、281 頁。

<sup>2</sup>『筒台廿五年史』(筒台史編纂会、1928 年)、217 頁-218 頁。

<sup>3</sup>「予科問題の座談会開かる」『神戸商大新聞』(1930 年 5 月 15 日)。

<sup>4</sup>「予科問題の其後の展開」『神戸商大新聞』(1930 年 10 月 15 日)。

<sup>5</sup>「神戸商業大学予科(調査資料)」神戸大学附属図書館大学文書史料室所蔵。

<sup>6</sup>「予科問題の想ひ出」『凌霜』第 88 号、(1939 年 1 月 6 日、凌霜会)、7-8 頁。

<sup>7</sup>佐野善作『日本商業教育五十年史』(東京商科大学、1925 年) 127 頁-128 頁。

<sup>8</sup>「予科併置問題につき佐野商大学長は語る」『筒台学報』第 5 号、(1927 年 11 月 1 日)。

## 「学生寮の時代」④ 江戸時代の「学生寮」

かなざわ ふゆき

金澤 冬樹(東京理科大学職員)

### ●ある寮生活

全国から集まった「無性な学生」が群れ、粗衣粗食で暮らす古びた「学生寮」。公的な施設であるが、寮の運営を行うのは寮生自身。「放歌高吟」する賑やかな寮生たちは、街中で「種々な悪戯」をしては捕まり、寮の門限に間に合わない時も。一方で「議論を闘はすを有益」として、寮内では常に寮生同士の議論が絶えることはなかった…。

ここまで読んで、読者は何を想像されるだろうか。旧制高等学校の寮生活だろうか、はたまた、戦後における大学の学生寮だろうか。実はいずれでもない。これは、今より150年以上前の江戸時代、当時最高学府とされていた昌平坂学問所の書生寮の姿である。上記の寮生活の様子は、『米欧回覧実記』などで知られる久米邦武(1839～1931年。文久3年書生寮入寮)の回想における記述<sup>1</sup>である。

### ●寄宿寮と書生寮

聖堂内にあった林家の家塾が、幕府直営の昌平坂学問所となったのが寛政9(1797)年のこと。昌平坂学問所には通学生と寄宿生がおり、寄宿寮の定員は30名であった(のちに48名に増員)。しかしながら、この寄宿寮はあくまで「御家人の輩」のためのもので<sup>2</sup>、諸藩の藩士や浪人に向けた寮建設の計画が持ち上がる。

林述斎・尾藤二洲・古賀精里の連署で提出された「学問所書生寮増之儀申上候書付」<sup>3</sup>によると、「学問所御再建の節尾藤良佐元御役宅を其儘相用ひ書生寮と名付書生共三四人指置」していたが、「其後陪臣浪人之遊学人

共入寮相願候もの」が増え、「此節人数式拾人余に相成り右寮内には居余」る状態となった。ついては「御家人御教育之余波相及び陪臣浪人共にても志有之もの御教育之御恩恵」のためにも、書生寮公設の建議がなされている。建議はすぐに受け入れられ、書生寮の公設が行われた<sup>4</sup>。

書生寮は南北2棟からなり、定員は当初は約40名。8畳間と6畳間があり、前者は3名、後者は2名が入室していた<sup>5</sup>。書生寮学規(1846年、以下「学規」)<sup>6</sup>によると、「御場所入寮之上は惣て陪臣浪人之無差別取扱候」とし、諸藩士・浪人から広く人材を呼び寄せた<sup>7</sup>。在寮期間は基本的に1年間であるが、延長も可能であった。

### ●自主的な寮運営

書生寮では、学生の自主的な運営が行われていた。まず寮中の事務を統括する舎長は、寮生が務める。その舎長は人格・学業成績などで選ばれるが<sup>8</sup>、「学規」では「舎長は年数のみを以申付候儀に無之新入寮の者にてても學術人物を以申付候間党類を結び批判等致間敷候事」としている。寮生は舎長に出入時刻など各種届出をする必要があり、様々な場面で舎長が寮事務の取りまとめを行っている。「学規」には他に「舎長より為致差図候儀一切違背致間敷候事」ともあり、一定の権限を持っていたと考えられる<sup>9</sup>。

舎長の下には舎長助(助勤とも)が2名いて補佐を行った<sup>10</sup>。他の寮役職としては、詩文掛、経義掛、月算掛などがあった。詩文掛は寮生の詩文添削などを行い、経義掛は儒学の經典のそれである<sup>11</sup>。寮には炊夫がいたが、予算管理などは寮生が行っており、それを行ったのが月算掛で、寮生が月交代で担当した<sup>12</sup>。「日々炊夫が仕入れる米・炭・薪・味噌・沢庵漬・野菜等の届をば帳面に記し、「月の終には、其の賄うた積数を勘定して、各人に割り合ひ、炊夫に之を取り立てさせる」のである<sup>13</sup>。

## ●議論の活発な寮生

次に寮生の様子を見てみよう。久米邦武在寮の頃は以下のような生活実態であったという。

寮は五十余年前の建物で、無性な学生が交々住み荒したから、汚いこと夥しく、棚は塵埃に、醬油徳利が油盞と雑居し、而も佐嘉の内生寮とは風が違ひ、縁の欄間に下駄を載せ、縁は草履をはいて歩くが、書生が袴の前摺計を括り、或は後摺計を括り、腰板を兵児帯に挟めて徘徊し、夫で御儒者の前にも出た<sup>14</sup>

久米は他にも、朝寝坊ばかりする先輩寮生に入寮当初驚いた話や、「礼記会」と称して本来は禁止されていた寮内での「共同調食」をする慣習、寮生の街中での悪戯(辻番を驚かすなど)などを紹介している<sup>15</sup>。

また一方で、寮内では議論が活発だった。出席などが定められた儒者の講義などとは別に、「同僚が申し合わせて随意に輪講会」が盛んに行われていた。久米によると「寮内でも申し合わせて会読をして議論を闘はずを有益とし、優秀な学友の卓抜な議論は人を啓発する力が強いと信じて居た」としている<sup>16</sup>。また詩文掛などを務めた南摩綱紀(1823~1909年。東京大学教授、女高師教授など)も、寮生の議論を通じて学ぶ様子を以下のように回想している。書生寮での学びは「生徒共が自分で修業するといふもので、先生に教へてもらふなどといふ事はない位なものであります」として、「銘々に申合せ会を定めて稽古」していたという<sup>17</sup>。

此時には教師も無ければ会頭もなし、書生同士で稽古するものである故、その議論といふものは大層喧ましいことで、口から泡を飛ばし、顔を真赤にして、今に攪合でも始めやうといふ迄に非常な激論をいたす。互

いに充分論じた所で、自分の節が悪かったと気が付きますと、あゝ我輩の説は悪かった誤ったと云ふて笑つて止めて仕舞ひ、少しも心頭に留めずして旧の通りにまた会をいたして居るといふ様な訳である。

久米や南摩の回想からは、書生寮では寮生による自主的な学習が行われていたことが伺える<sup>18</sup>。

### ●寮生活という「教育空間」

以上、粗描的にであるが、昌平坂学問所の書生寮について見てきた。重要な視点として、書生寮が単なる学生の「厚生施設」ではなく、多分に「教育施設」であった点である。また、寮生の自主性が重んじられていたことにも注目できよう。もちろん、当時の「寮」の意味は複雑で、明治時代以降の学生寄宿舎・学生寮とは安易に比較できない。ただ、通学生とは異なる「寮生活」という教育環境が書生寮に存在していたことは確かであろう。

江戸時代の寮生活と明治時代以降の寮生活、戦後の寮生活を同列に論ずることは極めて難しく、また適切ではないだろう。しかしながら、寮生活という「教育空間」が各時代の青年にとってどのような存在だったのか。本連載では今後、それぞれの様態に迫って考えていきたい。

---

<sup>1</sup> 久米桂一郎『久米博士九十年回顧録』早稲田大学出版部 1934年 p520-549。

<sup>2</sup> 寄宿寮の「寄宿諸取扱之議定」によると、「寄宿之儀者御目見以上之惣領二男三男厄介共四書素読済志厚者不苦候」「御目見以下者凡て講釈会読詩作等出来心掛厚者に無之候ては寄宿願不相成候」とし、年齢は「十四五歳より三十歳位迄者」としている。文部省(総務局 編)『日本教育史資料集

七』富山房 1903-1904 年 p163。

<sup>3</sup> 同上 p191-192。

<sup>4</sup> 書生寮は 1802 年ごろ、すでに運営を開始していたと考えられている。石川謙『日本学校史の研究』小学館 1960 年 p205。

<sup>5</sup> 鈴木三八男『「昌平黌」物語—幕末の書生寮とその寮生』財団法人斯文会 1973 年 p6-7。

<sup>6</sup> 『日本教育史資料集 七』p197-8。

<sup>7</sup> なお、書生寮は記録の残る弘化 3(1846)年～慶応元(1865)年の約 20 年間で、全国 100 近くの藩などから 504 名(実数)が入寮している。石川 p206。

<sup>8</sup> 鈴木 p7。

<sup>9</sup> 書生寮舎長を務めた重野成斎(1827～1910、漢学者・歴史学者)は寮生の喧嘩に際して、儒官に伝えず、当事者に退学を命じたという話もある。「館森袖海翁談 重野成斎先生」三浦叶『明治の碩学』汲古書院 2003 年 p242-243。また久米邦武も「書生寮の全権は舎長に委ねられ」ていたとしている。久米 p540。

<sup>10</sup> 鈴木 p7。

<sup>11</sup> 久米邦武によると、「詩文掛には同僚の詩を添削の出来る才力の人が選ばれたが、経義掛は堅実な勉強家が多数居り、共に舎長の候補者なるは言ふまでもないが、詩文掛が才学家として尚ばれた」としている。久米 p529。

<sup>12</sup> 鈴木 p8。

<sup>13</sup> ちなみに久米邦武は舎長助、詩文掛、月算掛を歴任している。「書生寮姓名簿」によると「松平肥前守／古賀門／文久三正月入／八月詩文掛十二月／舎長助元治元四月退／久米大一郎／亥二十五」と記載されている。「『書生寮姓名簿』『登門録』翻刻ならびに索引」研究代表者：関山邦宏『近世における教育交流に関する基礎的研究』第三次報告書(平成十年度文部



省科学研究費補助金[基盤研究(B)(2)]p30。

<sup>14</sup> 久米 p522。

<sup>15</sup> 久米 p522-527。

<sup>16</sup> 久米 p528。

<sup>17</sup> 南摩羽峰講演「書生時代の修学状態」孔子祭典会『諸名家の孔子観』博文館 1910 年。なお、本文は鈴木前掲書より孫引き(鈴木 p10-14)。

<sup>18</sup> 江戸時代の藩校や私塾における「議論する武士」の様態については、前田勉が詳細な検討を行っている。前田勉『江戸の読書会—会読の思想史』平凡社選書 2013 年。

## 2つの報道写真

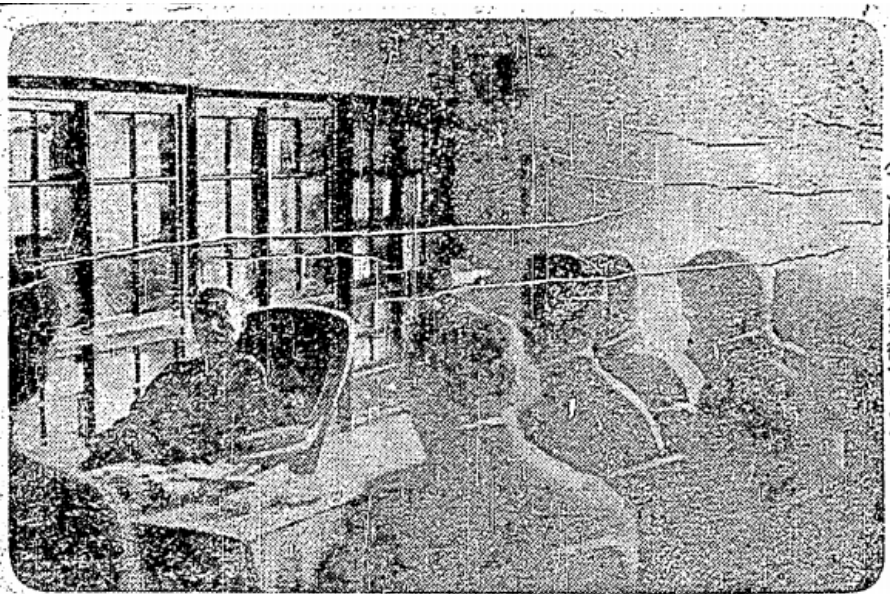
まつしま てつや

松嶋 哲哉(日本大学大学院)

### 1. 2つの写真

1922年12月2日、東京朝日新聞夕刊二面に次の写真が記事とともに掲載された。やや不鮮明なところもあるが、写真①は奥側にいる1人の男性と手前側にいる複数人の男性が対峙している場面、写真②は奥にみえる建物を多くの人々が取り囲んでいる場面である。

#### 写真①



## 写真②



上記の写真のタイトルは、「文部省へ押しかけた農学生」である。写真①の奥にうつる男性は、当時の文部次官、赤司鷹一郎であり、写真②の奥に見える建物は文部省である。これに対して、赤司に対峙し文部省を取り囲んでいる集団が「農学生」であり、この「農学生」とは、東京帝国大学に設置されていた実科の学生であった。実科の学生は、文部省に押しかけ、取り囲み抗議活動を展開したのであった。

本号では、文部省への抗議活動に至った経緯と抗議内容について明らかにしていきたい。

## 2. 実科廃止問題と実科独立運動

事の発端は、1920年11月、松浦鎮次郎専門学務局長が「東大農学部実科の如きは将来之を廃止すべきなり」と発言したことが明らかになったことにあった<sup>1</sup>。これに衝撃を受けた実科の在校生・卒業生が独立運動を展開してくのである。1920年12月15日に在京各学実科卒業生臨時大会を開催し、三科聯合の実科独立期成同盟会を結成し、「吾東京帝国大学農学部各実科をして専攻科を設置せる専門学校に独立せしむるは現下の急務と認め之が貫徹を期す」という決議文を採択した<sup>2</sup>。しかし、農科・林科・獣医科では独立運動の方針に違いが見られたために、1921年2月11日に三科聯合大会を開催し、三科合同の組織として駒場校友会が設置されることが決まった。以後、駒場校友会が議会への請願運動など独立運動を組織的に展開していく。

しかし、実科の独立は意外な形で実現する構想が出てきたのであった。1922年11月、実科を新設する宇都宮高等農林学校に合併し、実科を廃校とする計画が明らかとなったのである。そのことによって、予算をかけずに実科の独立を果たそうとしたのである。これに対して、東京帝国大学総長の古在由直が賛同したこともあって、独立運動を展開していた人々にとって大きな衝撃をあたえる。

実科の宇都宮移転に対して駒場校友会、在學生は当然のごとく反対した。11月25日には在校生が同盟休校を決行。学生大会を開催し「吾人は飽くまで初志の貫徹を期し死すとも駒場を去らず」<sup>3</sup>と決議した。これの動きに卒業生も反応し、11月30日、古在総長に絶対反対の決議文を提出し抗議したのであった。

このような雰囲気の中、ついに12月1日、学生たちによる直接行動がとられる。

### 3. 「文部省へ押しかけた農学生」とその顛末

読売新聞(1922年12月2日、朝刊)の報道によれば、1日午前9時ごろ実科生三百有十名が文部省に出向き鎌田文相に直談判をしようとするが、文相が不在のため委員15名が赤司次官に面会したという。その場でのやり取りは次のようなものであった<sup>4</sup>。

吾が実科は明治十九年の創設に係り廿三年文部省の主管となり当時独立すべきであつたが其機を逸して今日に及んで居る此間卒業生を出す事三千余名で或は地方農業の實際に従事し相当の成績を挙げて来たが而も実科たる関係から兎角継児扱にされ経費の如きも在学及卒業後の待遇等も不十分であるから此際独立の専門学校にされたい。

実科は、「継児」扱いされて待遇なども不十分であるから独立を望むと主張している。自らのことを「継児」と表現しているところに、学生たちのアイデンティティと実態——東京帝国大学生という自負にも拘わらず帝大生に比べての不平等感——が良くあらわれている。

これに対して、赤司文部次官は「諸君の意見は尊重するが教育行政上の事は全体から観察する必要があり学科及組織の変更乃至経費の問題は関係する処が広いから今遽に具体的の回答は出来ない」と返答し学生をたしなめた。しかし、これに満足しない学生たちは、松浦鎮次郎専門学務局長、栗屋謙実業学務局長に陳述し、午後二時頃から文部省玄関前を占領し演説を始めたのであった。これに参加した学生が朝日新聞のインタビューに次のように答えている<sup>5</sup>。

駒場を独立させてやるとの確かな言明を聞く迄は文部省を去らない決心です。殊に休校した以上は文部省に日参して目的貫徹を期します。

不幸にして不成功に終わればこの退学届(懐中した退学届)を差し出して国に帰る許りです。

この学生による直談判に困惑したのは大学当局であった。これをうけて、農学学部長の川瀬が文部省にかけつけ、「自分はこれから文部当局及び古在総長と会見して諸君の意の在る処を陳べ」その結果を報告することを条件に学生たちを引き上げさせることによってその場は解決することができた<sup>6</sup>。

学生による文部省への直談判は、大手新聞に掲載されることによって、世論の注目の的となった<sup>7</sup>。以後、実科の独立運動は駒場校友会によって発展していく。学生による直談判の翌日の2日夜には駒場校友会第一回臨時大会が開催され今後の方針を確認した。今後の運動方法として以下の方法を確認した<sup>8</sup>。

即ち事態刻々危急に瀕せるを以て文部当局及関係方面全体に亘りて全国的運動を開始すること、全員を十数班に分て各分担区域に迅速且つ熱烈なる運動を開始すること、し、運動の結果は刻々と本部に報告せしめ本部は随時局面の展開に伴い画策すること、せり、又学生の休校に関しては止むを得ざる事情ありと雖も目的と手段とを弁別せざらんか却て社会の同情を失するの虞あるを以て学生をしてただちに就学せしむること、せり。蓋し学生の大部分は白熱的激憤の中にありしを以て更に一層猛烈なる運動を継続すべきことを主張して止まざりしも、満を持して機会の到来を待つこと、し、決し、学生は一切を卒業生に一任したる形式となし、実科の万歳を三唱して散会せり。

今後の独立運動は、駒場校友会が全国的運動として展開することを確認しており、その後も議会への請願、政党への根回しと様々な活動を行って

る。

しかし、実科独立が決定したのは1932年であり、東京高等農林学校が開校されるのは1935年である。実科が独立するには、約10年間にわたる駒場校友会による独立運動があった。

#### 引用・参考新聞記事一覧

「駒場の農学生四百名文部省に押寄す」『朝日新聞』（東京：夕刊）1922年12月2日。

「愈独立の真眼目に突進する農大実科」『朝日新聞』（東京：朝刊）1922年12月3日。

「駒場実科問題は校友に一任す」『朝日新聞』（東京：夕刊）1922年12月4日。

「鎌田文相曰く『よく考へよう』駒場実科の委員」『朝日新聞』（東京：夕刊）1922年12月6日。

「農大実科の移転は不都合だと陳情」『読売新聞』（朝刊）1922年12月2日。

「駒場農大実科の独立運動」『読売新聞』（朝刊）1922年12月2日。

「同盟休校した駒場農科実科生」『読売新聞』（朝刊）1922年12月3日。

「騒いでいる農大実科生ひとまず校友へ」『読売新聞』（朝刊）1922年12月4日。

---

<sup>1</sup> 駒場校友会編『母校独立記念号』1936年336頁。

<sup>2</sup> 同前書、141頁。

<sup>3</sup> 同前書、183頁。

<sup>4</sup> 「駒場農大実科の独立運動」『読売新聞』（朝刊）1922年12月2日。

<sup>5</sup> 「駒場の農学生四百名文部省に押寄す」『朝日新聞』（東京：夕刊）1922年12月2日。

<sup>6</sup> 前掲『読売新聞』（1922年12月2日）。

<sup>7</sup> 新聞記事については記事末を参照。

<sup>8</sup> 前掲書、駒場校友会編、189頁。

## 新制大学の生態誌(12)

### —新制大学と戦争・平和[6]—

いのうえ みかこ

井上 美香子(九州大学)

前号に続いて、『大学に於ける一般教育—一般教育研究委員会報告—』（昭和26年）をみていくこととする。同報告書の社会科学系列で例示されたコースプランは以下のとおりである。下記科目のうち、○印を付した科目は「戦争」や「平和」をテーマに取り上げたり言及したりしている科目を示している。

○法学(日本国憲法)、○政治学、経済：第1案、経済：第2案、社会：第1案(家族の問題)、社会：第2案(社会)、総合科目：社会・経済・政治の総合コースプラン、歴史、地理：第1案、地理：第2案、教育：第1案、教育：第2案

※(カッコ内は具体的な科目名)

社会科学関係では、「平和」や「戦争」というテーマを講義内容に盛り込んだ科目は、「法学(日本国憲法)」と「政治学」の2科目だけであった。「法学(日本国憲法)」では、日本国憲法の諸原理を理解させることによって「自主



的民主的、かつ平和的な日本国民の資質を養成」(p 265)することを目指し、講義の後半部分に「平和維持の方法」や「世界平和」を国際連合や平和論などの思想的観点から検討するものとしている。

次の「政治学」では、「社会生活における政治諸現象を観察考究することにより、近代民主政治の意義、原理、機構、作用等を理解せしめると共に、日本における民主主義の現実とその健全なる発展のためには如何なる問題が解決されるべきか」(pp21-22)を考えられる市民となることを目的に掲げているが、「平和と国際政治社会」については僅かに1時間を割くにとどめている。また、自然科学関係についてであるが、示されたコースプラン「数学、物理的科学、地学、生物的科学、統計学」のうち、「平和」や「戦争」に関連するテーマを扱う科目は1つもなかった。

さて、ここまで6回にわたり『大学に於ける一般教育—一般教育研究委員会報告—』(昭和24・25・26年)について検討してきた。敗戦直後、経験したばかりの「戦争」とその経験を経て迎えようとする「平和」について、一般教育を通して大学の教員らはどのように向き合い得たのか(あるいは向き合えなかったのか)。これまでみてきた昭和24年・25・26年度の『大学に於ける一般教育—一般教育研究委員会報告—』をもとに、以下に総括していきたい。

ここに示した表は、『大学に於ける一般教育—一般教育研究委員会報告—』(昭和24・25・26年)に掲載された科目案である。表から、「戦争」や「平和」を講義の素材として扱った科目は、人文科学および社会科学系列の、歴史／倫理／哲学／政治／経済／心理／法学／政治であることがわかる。ただし、これらの科目ですら「戦争」や「平和」というテーマを講義の一部で取り上げるにすぎなかった(詳細は、本ニューズレター第8号～12号を参照のこと)。さらに自然科学系列に至っては、「戦争」や「平和」を扱う科目は皆無であった。

【『大学に於ける一般教育—一般教育研究委員会報告—』(昭和24・25・26年)科目案】

	人文科学関係	社会科学関係	自然科学関係
昭和24年	文学(国文学)、○歴史(国史)、○歴史(西洋史)、哲学、○倫理学、美術	○政治学、○経済学、法学、人文地理学、社会学	数学、統計学、物理学(第1~2案)、天文学、化学、地学、(第1~2案)、生物学(第1~2案)、人類学、物理的科學、生物学的科學
昭和25年	○哲学、○倫理学、文学、歴史学、美術	政治学、経済学、社会学、法律、人文地理学、○心理学、○倫理学	数学、物理学、化学、天文学、地学、生物学、心理学、統計学、人類学
昭和26年	哲学(第1~3案)、倫理学(第1~2案)、文学(第1~6案)、○歴史(第1・2・3・4案)、音楽(第1~2案)、美術(第1~3案)、総合科目(哲学-日本の精神的遺産、美術・文学・音楽、人文科学-世界文化史上に於ける東洋)	○法学(日本国憲法)、○政治学、経済:第1案、経済:第2案、社会:第1案(家族の問題)、社会:第2案(社会)、総合科目:社会・経済・政治の総合コースプラン、歴史、地理:第1案、地理:第2案、教育:第1案、教育:第2案	数学、物理的科學、地学、生物学的科學、統計学

備考:○印や下線を付した科目は「戦争」や「平和」をテーマとして取り上げたり言及したりしている科目を示す。

昭和24年および25年、26年の報告書では、一般教育の理念として世界平和に貢献できる人材の育成を掲げ「平和」というキーワードが全面に押し出されている。しかし、そのための具体的な方法—すなわち世界平和に貢献できる人材を育成するための一般教育科目の教授する具体的内容や授業方法など—を示すまでには至らなかった。

しかも、昭和24・25年とは異なり昭和26年の報告書では、人文・社会・

自然科学のそれぞれでカリキュラムの編成方法や教授法(学生の学習意欲を刺激する為にどのように授業を工夫すればよいかなど)について言及しており、掲げた理念の具現化にむけた具体的な検討というよりも、カリキュラム編成や教授法などの技術論へと一般教育研究委員会の関心が傾いていったことが分かる。

勿論、一般教育研究委員会も断っているように、同報告書で紹介するコースプランは模範とするべき基準として発表されたものではなく、あくまで試案にすぎない。しかし、一般教育課程をはじめて大学に設けて学生達に教授することとなった大学の教員らからすれば、この報告書で示された試案は当然参考に値するものであったと推察され、その影響力は小さくなかったことも事実であろう。

昭和 24 年、25 年、26 年の『大学に於ける一般教育—一般教育研究委員会報告—』では、「平和」を追求する民主主義的市民の育成を一般教育の使命として掲げており、その理念や科目案からは「平和」や「戦争」への“意識”が垣間見られる。しかし、そのために学生達に何を教授しどのように検討させればよいのか、その具体的な内容と方法を提示するまでには至らなかったのである。

## 青年志賀覚治の上京と徴兵

こみやま みちお  
小宮山 道夫(広島大学)

前号で紹介した論説を寄稿した志賀覚治なる人物、いったいどのような者だろうかと気になっていたところ、灯台もと暗しで、「論説」の直前の記事、福島県尋常中学校『同窓会報告書』第1巻(明治25年12月21日発行)の「先輩の経歴」に「蒼波薄暮 志賀覚治君」として本人の投稿文とともに紹介文が掲載されていた。

そこでは「同窓会誌編纂に付き予か卒業後の経歴を徴せらる然れとも予は同窓諸君に向て諸君の耳を壮にすべきほどの話柄なきを如何せんや況ん<sup>77</sup>や今江潮に落魄し天地に踟躕し人生の行路ただ今日ありて明日なくまた明日なきの墳裏に在るに於てをや(中略)予が卒業後四年有余の経歴は失敗と功名とを叙して諸君の哄笑を求むるほどの材料なきなり」との万事大仰な青年志賀らしい断り書きとともに、志賀が自身の経歴を語っていた。

志賀は「明治二十一年第一回の卒業生」で、「教師某氏の厚意に依りて東京に出で東京の某氏の厚意に依り修学の道を得た」とのこと。「東京にては英語を知らぬは車夫になれぬと田舎にありし頃聞きたりしが成程東京は人間の掃き溜めなれば立派な英語先生も車を挽かねばならぬ事もあるなり」と理解していたようで、東京に到着した志賀は「予が五歳間の苦学を証せる卒業証書の如きは東京にては缶工場の物品に貼り付けたる正札程にも当らざりし」などと自嘲。「嗚呼余は実に醒めたり田舎の夢東京の夢」と感慨頻りである。

田舎から上京した直後の自らの姿を「此の憐れなるポツト出が万世橋上肩摩穀撃の地に周章狼狽する状を見よ右に避け左に走り車夫馬丁に馬鹿野郎間抜け小僧と嘲らるゝ状とおもへ」と表現する。そして「予は此の時に於

て父兄に忠告を用ゐず跡を晦して自ら難地に入りしを懺悔したり然れどもなほ余まれる勇気を鼓し一封の添書に依り尚ほ再応の突撃を行ひたり」と、紹介状にすがって住み処を求めたようだ。

縁を頼って「某氏に寓する事半歳ならずして玄関番より書生、書生より食客、食客より雇教師とまで昇進した」志賀は、「二十二年の夏より或る新聞屋に雇はれたり初の間は趣味なき業に従事したりしが追々地位を得たり地位を得たりしといへば立派なれど実は信用をもらひたるなり」と東京生活に順応していく。そして「二十二年の秋より新聞社より午前丈けの時間を得たるを以て慶應義塾に入り第二級に編入せられたり」と向学心の充足に努める。

さらに「二十三年一月慶應義塾大学部創立あり同塾卒業生のみにて生徒の員数不足なるを以て同塾三等以上より志願者を募る予亦之に応じ及第」し、本格的な学業生活が始まるかと思いきや、「慶應義塾大学部文学科にある事半歳適ま徴兵適齡にて東京々橋区役所に身体検査を受け合格せりこれ予の為め一喜一憂の本」となった壮丁の年齢を迎えることとなる。そして「二十三年七月区役所より近衛歩兵現役に当籤の報」を受けた。「兵役の義務たるその名頗る名誉たるには相違なきもこれが為め学業を中絶し前途多少の阻碍を受けざるを得ざるを思へば中心憾みなき能はざり」との心情で、「兵役を忌む事は何ツ所にも行はるゝ事なから予は之を以て国民の愛国心に乏しきを表するものなり国家の元氣の衰へたる徴候なりとして里閭の父老を離せし事ありしが扨て自分が實際服役と極り三年の御役目がおのか身に課せらるゝ事とおもへば結構なる心地もせざりき蓋し鉄砲玉の怖きにはあらず三年と云ふ歳月が惜しきなり」とその無念を述べている。

志賀の軍隊生活はというと、「十二月一日入營の当日となり予は近衛歩兵第一聯隊なる竹橋の兵營に」入り、「実に兵營は濠一重にて娑婆とは別天地を作り風物悉く殊異なり、里閭にありて想像せし事は茲に至て全く齟齬するを発見したり」というものであった。「軍隊は命令の場所にして「ホワイ」或

は「ホワツト、ホーア」の字なきことは何人も知るとことなるが実に此処には自由の微光だにも認むる能はざる压制世界の極圏なり、極圏の冬三ヶ月なり」と回顧する。「長上たるもの部下に向て之を濫用するの患あるなり」と軍隊内部の「压制」を問題とし、「長上の濫用は少きも同輩則ち兵隊同士に於て先進古参の者之を濫用して後進新参の者を压制すること言語に絶たるものある也」とつらい経験を吐露している。「余は幾たびか失望の叫を為したり予は幾たびか古参兵の胯下を出たり、然れども予は到底軍律は従はざるを得ざるなり早晩一匹の兵卒たらざるべからず茲に於て自ら折り自ら抑へ一卒にて袖章の多からん人には惟命惟聴きたり、その命ずるところは皇帝陛下の命令その言ふところは日本国の号音とおもへ居たり」という精神的風土があった。「初めは心ならずして之を為せり中頃知らずへ之を為すに至り終りには喜んで之を為すのみか然かも熱心なる信仰を以て之を為し次ぐに涙を以てするに至る人性の感化も奇なる哉、予は茲におみて軍隊教育の真意を得たり」と軍隊教育の異常性を体感している。

軍隊は「衣食の患なく時刻来れば三食呼ばずして膳に上り米薪の心配せずとも飢凍の患なく、夏には素を衣冬には緇を纏ふ人に向つて其装貌を恥つるな」いもので、「時間の制限と喇叭の号音なくんば当に極楽園」だと述べる。更に「街路潤歩を歩べば塗人道を譲り婦女恐れ避く」ので、「憲兵の干渉なくんば兵隊の威厳は当さに先制国の帝王にも優るべし」と軍隊生活を振り返る。勘違いを起こす者が続出したとしても何ら不思議ではないことは想像に難くない。

そんな立派な軍人になりかけていた青年志賀だったが「本年六月熱を患ひ病気除隊なる不名誉の名称の下に帰休を命ぜられた」ことにより、「この淡泊なる快活なる壮絶なる生活中に得たる名誉ある勇壮なる事跡を叙して諸兄に誇示する能はざる」ことになった。これが冒頭の「今江潮に落魄し天地に

踟躕し人生の行路ただ今日ありて明日なくまた明日なきの墳裏に在る」に繋がっているのである。志賀は故郷に帰ってすぐ「石川郡有志の招聘に由り同地方有志家の共立になれる石川義塾の為に教授の任に当」った。「任期は来春迄の約束」で「来春に至れば上京すべし」と結んでいる。

この文に続けて編集子は志賀の紹介をする。「君は外温にして内剛正に是れ張良の風あり而て其高志を抱きて空く失路の間に馳聘せしの状亦張良に似たるあり」と評した上に「君文思富瞻加ふるに演説に巧にして筆を下せは忽ち龍躍り口を開けば忽ち虎嘯く辞鋒鋭利疑無敵。筆力縦横以有神」とシモクラモチ カムケべた褒めである。「明治三年二月二十五日を以て磐前郡下蔵持村字嘉睦家に生る」と倒置的に先輩の紹介を終えている。

志賀は明治3年生まれというので、失意のまま故郷に帰ったこの時22歳。約1年の雌伏の後には再度上京する意気込みを見せているが、その後の経歴は不詳である。『同窓会報告書』誌上では明治27年2月の同誌第6巻に、気管支を患い早世した友人のことをうけて著した「志賀覚治此処ニアリ」との身辺記事、同じ巻に「米作改良記念碑」の碑文を撰した記事、そして明治29年4月の第13巻に「三人逝矣」と題する病死と戦死とで早世した友人3人の回想文を寄せている。『同窓会報告書』は第50巻まで目を通したが、少なくとも目次上で志賀の名をみる機会には他になかった。もっとも欠巻も多いので寄稿はこれのみではないだろう。実際、前掲「志賀覚治此処ニアリ」の書き出しは「此の半年の間同窓会雑誌に跡を晦まし諸君の尋ねものとなり居りし志賀覚治は」とあるので、屢々登場していたことであろうと想像する。

その健筆家志賀は同窓会雑誌には飽き足らず、実は単行本を刊行するに至っている。国立国会図書館近代デジタルライブラリー（本年5月に国立国会図書館デジタルコレクション<<http://dl.ndl.go.jp/>>と統合されます）で

確認すると、明治 28 年 7 月に『将来之日本潮流』と、翌 29 年 2 月に山海堂から『軍隊』の 2 冊を著していることがわかる。両書を確認したが、いかにも青年志賀氏の筆致である。そして『将来之日本潮流』の奥付の著者名の脇には「福島県磐前郡鹿島村大字下蔵持」と住所記載がある。「下蔵持」にこのような筆致の人物が二人とは居ないものと思われるので本人に間違いはなかろう。一方『軍隊』の志賀覚治の住所は「東京市本郷区春木町三丁目二十一番地」とあるが、巻末の広告「志賀覚治君著書目録」に『将来之日本潮流』とともに、近刊として『白と黄』『勤儉之競争力』『書生道』の 3 冊が示されていることからこれも同一人物とわかる。

余談だがその後中学教科書や学習参考書で有名になるこの本の出版社山海堂は明治 29 年 1 月の創業。国会図書館の蔵書検索で確認する限り、この『軍隊』が一番古く、創業の翌月に出版していることから最初の出版物なのではないだろうか(さらに余談になるが筆者がかつて読んでいた自動車ラリーや釣りの本を出版していたのがこの山海堂で、平成 19 年まで 111 年余り続いた後に倒産していた事も今回調べていて初めて知った<[https://ja.wikipedia.org/wiki/山海堂\\_\(出版社\)>](https://ja.wikipedia.org/wiki/山海堂_(出版社)>))。おそらく青年志賀は『将来之日本潮流』の刊行に勢いづき、山海堂の創業者来島正時の知遇を得るなどしてその気になって上京し、執筆活動に入ったのであろう。

残念ながら今のところ近刊とされる志賀の著作 3 冊の現存は確認できず、その後の志賀の身の上も把握できていない。『白と黄』の内容は題名からは量りかねるが、『軍隊』はまさしく志賀氏の経験そのものずばりである。『勤儉之競争力』と『書生道』も、未見ながら志賀氏の多感な青年時代の経験をふんだんに盛り込んだ力作に違いない。中学進学と上京がもたらした青年の境遇と人生の変転とに興味は尽きない。



# どんなことが「自治ではない」とみなされたのか(11)

## —東京府尋常中学校校長 勝浦鞆雄の校友会活動観(その3)—

とみおか まさる

富岡 勝 (近畿大学)

前号では東京府尋常中学校校長勝浦鞆雄の中学校観と校友会活動観を検討するための史料として、勝浦の著書『中等教育私議』(1892年)の全体像を紹介した。勝浦はこの『中等教育私議』を通じて、理想的中学校像として、受験目的ではなく普通教育の「精神的訓練」の観点から各学科の授業が配置され、「精神的訓練」を実施するために校内組織と規則が整備され、家庭と連携しながら生徒一人一人のことを把握した指導がおこなわれるという中学校像であった。

本号では府県立の中学校が理想的な中学校像からかけ離れてしまう原因として勝浦が挙げている三要因を紹介していく。

### 要因1 予算不足

府県立中学校が理想的中学校像から離れてしまっている要因として勝浦が第一に挙げているのは、予算不足である。明治22年の文部省の統計をもとにした勝浦の計算によれば府県立の尋常中学校43校の計546人の教員給料の平均は1ヶ月平均26円70銭強であり、「此クノ如キ寡額ノ報酬ヲ以テ国家重大ノ任務ヲ負ハシメテ果シテ適当ナル効果ヲ呈スベキカ」<sup>1</sup>というように予算不足による良教員確保の難しさを問題視している。東京府の尋常中学校の教員給与平均は1ヵ月24円であり、勝浦の東京府の尋常中学校に対する危機感は一層高まっていたと思われる。

### 要因2 教科書の質の問題

第二の要因として勝浦が挙げるのは、中学校の課業書つまり教科書の問

題である。中学校の教科書は出版点数が少ないだけでなく、その質に問題があると勝浦はとらえる。多くの中学校教科書が欧米の原書の直訳であり、中学校での授業時数や学科間の連関などが考慮されていないという<sup>2</sup>。さらに勝浦の重視する精神的訓練という観点からみれば、「此等ノ刊本中教科書トナスニ足ルベキ者寥寥トシテ暁星畜ノミナラザルナリ」<sup>3</sup>という状況であると勝浦は述べる。

### 要因3 学校管理の方法の不備

そして府県立中学校が理想的状態から離れている第三の要因として勝浦が挙げるのが、学校管理の方法が不備であるという点である。学校の管理方法はもちろん学校場所、生徒数、学校の構造などによって多少異なるが、適切な学校管理をおこなっていくためには、規則を機械的に当てはめていくようなやり方では不適切であるとする。勝浦は学校も「一箇ノ機体的団結」であるから、「其ノ管理ノ秩序モ亦機体的ヲ以テ生存セザルベカラズ」とする。こうした考え方は、おそらく尺振八による翻訳書『斯氏教育論』（1880年）などを通して当時知られていたハーバード・スペンサーの社会有機体説の影響があると思われる。

勝浦の考える機械的でない「機体的」な学校管理は、次のようなものであった。

各部ノ機関ト機関ト相衝突セズ円満ニ靈活ニ其ノ運転ノ功ヲ遂グルコトヲ必要トス。故に余ガ生徒管理上ニ望ム所ハ其ノ大綱ニ係ル者ハ学校固リ之ガ規制ヲ定メ厳明ニ施行スル要アリト雖其ノ細節小目ハ之ヲ主務者ニ任ジ総テ其ノ程限内ニ於テ自主独立ノ運動ヲ為サシメ可及的全校ノ良習慣ヲ造リ之ヲ以テ自然制裁トナシ以テ生徒各自ノ本分ヲ全クセシメムコトヲ要トス

つまり、勝浦の考える学校管理方法は、機械的な取り締まりでもなく、自由放任でもない学校管理の在り方であったといえる。学校全体の管理方針は明らかにしつつ、教員一人一人にある程度の自由裁量を与えながら活動させ、生徒たちにも自主的に自分たちの行動を律していくような「自然制裁」の雰囲気醸成されていくことを勝浦は目指していた。

具体的には、各教室には主任となる教員を定め、「室内生徒ニ関スル細大ノ事ヲ担任セシムベシ」と述べる。つまり学級担任の導入案である。この教室担任の教師の役割は、「生徒ニ対スル親密ナル関係ヲ保ツ」ことと「可及的父兄及保証人ト関連シ学校ト家庭トノ協力ヲ以テ訓育ノ目的ヲ達スルコトヲ図ラシムトスルナリ」というように、生徒と密接に関わって教育するとともに、家庭との協力関係を築いていくことであると勝浦は捉える。

こうした担任教師による機械的ではない教育を実行させながら、教室の生徒たちにも一定程度の自主的な活動をさせようと勝浦は考え、実際に東京府尋常中学校で実行に移している<sup>4</sup>。この点が、勝浦の校友会活動観につながってくると考えられる。これについて次号で検討し、勝浦の校友会活動観のまとめとしたい。

---

<sup>1</sup> 勝浦軼雄『中等教育史私議』（発行者：吉川半七、1892年）、40頁～41頁。

<sup>2</sup> この問題については、文部省で1886年から中学校の教科書についても検定が実施され、それ以前の教科書よりはある程度の改善が試みられている可能性もあるが、詳細な検討は別の機会に行いたい。

<sup>3</sup> 勝浦前掲書、43頁。

<sup>4</sup> 『日比谷高校百年史』（1979年）、拙論「東京府尋常中学校における校友会の成立」（『中等教育史研究』中等教育史研究会、15号、2008年）。

## ニューズレター 2015 アワード発表!

こみやま みちお  
小宮山 道夫(広島大学)

ニューズレター創刊1周年を記念して、2015年で注目された記事のランキングを企画しました。同人相互で投票することとし、次の通りルールを設定し、告知しました。

記事部門、コラム部門の2部門で年間のランキングを決定します。記事部門では年間ランキングトップ10を決定します。各号に同人がそれぞれ3ポイントを持ち、その号で良かったと思う記事に、1ポイントずつ3本でも良いし、1本に3ポイントでも良いのでポイントをつけてください。コラム部門は年間ランキングトップ3を決定します。10本のコラムについて、同様に3ポイントを各同人が評価してください。

### 〈基本ルール〉

- ・1本に1～3点を配分します。
- ・自分の文章にはポイントは入れられません。
- ・途中参加の同人も第1号から評価してもらいます。

### 〈注意点〉

この企画は記事の「優劣」を決定するためのものではありません。内容が気に入った、興味を覚えた、なるほどと思った、新しさを感じた、参考になった、など、基準は何でも良いですが、あくまでも主観的に「良いと思えた記事に」投票を行ってください。

厳正審査ではありませんので、評価に一貫性がなくとも全く問題ありません。各号十数本ある記事から最大3本にしか配点できないシステムですから、結果的に得票が全くなかったとしても、筆者当人は気にする

必要はありません。1年間を振り返り、全記事を読み直して新たな発見を  
してもらうのが趣旨です。そのついでにポイントが入っていれば更なる  
励みになることでしょう。あまり深刻に考えず、しかし真剣に楽しみながら  
評価を行ってください。

今回は残念ながら神辺、田中(智)、田中(祐)、徳山の4氏は事情により棄  
権のため、公平を期すため、4氏の記事は評価対象から外しました(参考記  
録としては取り上げましたので後述します)。また、山本氏は全号を通じて3  
ポイントあるボーナス点を行使しませんでした。このため、理論上は記事部門  
については総計348点(基本点(3点×12号分×9人)+ボーナス点(3点  
×8人))を143本の記事に割り振る、コラム部門については総計27点(3  
点×9人)を11本のコラムに割り振ることとなっています。しかし4氏の35  
本の記事に入った105点、田中(智)氏のコラム2本に入った6点は除外し  
たため、実際には記事部門は総計243点を108本の記事に、コラム部門は  
21点を9本の記事に割り振ったことになりました。

投票に際しては各同人様に苦勞しました。得票はあくまでも今後の励み  
にするための参考として頂ければ幸いです。

それでは以下に各部門を発表します(得票同数の場合は記事掲載号順)。

## ■コラム部門■

《第1位》 6票

和崎光太郎「受験のためではない学びとは」(第5号)

《第2位》 4票

富岡 勝「学生寮が注目されつつある」(第3号)

《第3位》 3票

井上美香子「キャンパスは語る 九州大学と箱崎キャンパス」(第8号)

## ■記事部門■

### 《第1位》 8票

松嶋 哲哉「帝国大学の中の専門学校—北海道帝国大学の専門部の成立  
～廃止まで—」(第7号)

### 《第2位》 7票

井上美香子「新制大学の生態誌(1)—新制大学発足期の大学生のアルバイト事情—」(第2号)

山本 剛「近代日本における大学予備教育の研究⑩—東京商科大学の  
「籠城事件」に注目して—」(第10号)

### 《第4位》 6票

井上美香子「新制大学の生態誌(4)—大学生の恋愛事情—」(第5号)

金澤 冬樹「『学生寮の時代』③—『遊学案内』に見る下宿事情—」(第12  
号)

### 《第6位》 5票

谷本 宗生「現代の大学をめぐる状況をいかに考えるか」(第2号)

谷本 宗生「まち・ひと・しごとを想う—明治20年代の本郷弓町2丁目から  
—」(第4号)

谷本 宗生「第一高等中学校で『唱歌』教育が行われたことを教育史的に  
捉えておこう!—鳥居忱(体操軍歌)から鈴木米次郎(唱歌)へ  
—」(第5号)

### 《第9位》 4票

小宮山道夫「『明治十七年度青森県会議按』(内閣文庫)にみる青森県の  
中等教育再編」(第3号)

小宮山道夫「青森県の中等教育再編と専門学校の廃止」(第4号)

谷本 宗生「現代の新しい教育機運と歴史の教訓との関係性について」  
(第7号)

吉野 剛弘「新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道 第 7  
回 学校沿革史にみる補習科・専攻科(3):福岡県(3)」(第 7  
号)

富岡 勝「どんなことが「自治ではない」とみなされたのか(5)—1903 年  
の松本中学『校友』編集委員の言説(その2)—」(第 7 号)

堤ひろゆき「旧制中学校生徒の伝統とスポーツ」(第 9 号)

吉野 剛弘「新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道 第 11  
回 学校沿革史にみる補習科・専攻科(7):島根県(1)」(第 11  
号)

堤ひろゆき「活版印刷以前の校内雑誌」(第 11 号)

松嶋 哲哉「回想にみる東京帝国大学農科大学(学部)実科」(第 12 号)

小宮山道夫「志賀覚治『普通教育と高等教育の連絡』にみる明治 20 年代  
教育界の問題」(第 12 号)

富岡 勝「どんなことが『自治ではない』とみなされたのか(10)—東京府  
尋常中学校長 勝浦軼雄の校友会活動観(その2)—」(第 12  
号)

## ★参考記録★

参考記録として、棄権者の記事のうち上位に位置付くものを以下に掲載し  
ます。高得点の記事が多いだけにランキングから除外するのは残念でした。

## ■コラム部門■

田中 智子「60年安保闘争から現代の安保関連法案について考える」(第  
10号) 5票

## ■記事部門■

徳山 倫子「大阪市的女子教育①女子教育と家政学—大阪市立大学生活

科学部に着目してー」(第9号) 9票

田中 祐介「恐れず、怠ることなく日記をつづれー学徒兵の『軍隊日誌』に  
みる点検指導と軍人精神ー」(第8号) 8票

神辺 靖光「逸話と世評で綴る女子教育史(11)ー北海道開拓者の妻を養  
成する開拓使女学校ー」(第11号) 8票

田中 祐介「日記資料群からみる青年知識層の生活と自己形成」(第1号)  
7票

田中 祐介「戦時下の少女の日記と教員の叱責(1)」(第2号) 5票

田中 智子「〈資料紹介〉立教大学における戦後資料ー敗戦直後の学生の  
生活費とアルバイトー」(第3号) 5票

田中 祐介「戦時下の少女の日記と教員の叱責(2)」(第3号) 5票

神辺 靖光「逸話と世評で綴る女子教育史(6)節婦烈女と薙刀」(第6号)  
5票

田中 祐介「『軍隊日誌』に刻まれた学徒兵の体調悪化と日誌の途絶」(第  
6号) 5票

以上、読者諸氏の評価はいかがだったでしょうか。各同人の記事に2016  
年もどうぞご期待下さい。



『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』  
刊行要項(2015年6月15日現在)

- 1.(目的)広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
- 2.(記事のテーマ)記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
- 3.(刊行頻度・期間)研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
- 4.(編集委員会・編集世話人)発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当人は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
- 5.(執筆者)執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
- 6.(記事の責任)記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
- 7.(記事の種類・分量)記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
- 8.毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
- 9.ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。  
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
- 10.ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
- 11.以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

去年は文科省の通知に関する報道をきっかけに、人文・社会科学の意味やあり方が各所で議論されました。数々の議論の中で、吉見俊哉氏の「人文社会科学ほどに意味や価値の問題について長い時間をかけて議論してきた知は他にない」という指摘には刺激を受けました(吉見俊哉『人文社会系は役に立たない』は本当か?』『現代思想』2015年11月号 p94-95)。「理系」の大学に勤めていると、逆に人文・社会科学について意識する機会も多いです。今年もしっかり考えを深めていきたいと思います。(金澤)

コミックのスヌーピー@ピーナッツは誕生 65 年を迎え、今も世界中で愛されています。そんなスヌーピーの印象深い1コマ(1971年5月17日)。ある日スヌーピーが、ぼつり呟きます。「誰だってなんらか希望を必要としている。ときにほんのちょっとしたことが、僕らに希望を与えるんだよ。友だちの微笑みだって、歌だって、木々の上高く飛ぶあの小鳥の姿だって、…みんな」。作者チャールズ・M・シュルツ(1922~2000年)さんの思いは、今を生きる私たちもしっかり共感できますね。(谷本)

大学史資料センター(大学文書館)の役割は、卒業生の体験を聞き取ることも重要なことだと思います。現在、戦争体験を中心に聞き取り調査を進めています。今後は、学生運動体験の聞き取り調査も始めなければなりません。これはなかなかたいへんな課題です。(山本剛)

やっと学期末の繁忙から抜け出せそうです。編集作業が遅れて申し訳ありませんでした。今号の記事で紹介した勝浦軻雄の「機械的でもなく自由放任でもなく」という考え方は、色々応用できる部分があるかもしれません。創造的な研究活動ですが「原則毎月執筆」というこのニューズレターは、「義務としての仕事ではなく、締め切りなしの活動でもなく」という、私のなかで独特のポジションであり、大切にしたいなと改めて思っています。新しく執筆してくださる方を引き続き大歓迎ですし、諸事情でお休みの方、また一緒に書けるのを楽しみにしています。(富岡)

2015年は多種多様な評価をするよう迫られ、かつ私自身も評価を受ける年だった気がします。その1年の仕上げは本誌のアワードで、評価することの難しさを実感する1年でした。2016年は evaluative ではなく creative にいきたいと思います。(小宮山)

1月も半分まで来てしまいました。時間が過ぎるのは、本当に早いものです。今年九州大学百年史の編纂でこれまで以上に大忙しの1年になりそうです。気合いを入れて臨みたいとおもいます。今年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。(井上)

本ニュースレターを印刷される場合、Adobe Reader などの「小冊子印刷」機能を使ってA4サイズ両面刷りにすれば、ちょうどA5サイズの小冊子になります。